



第5回 自転車甲子園 優勝

上島町の魅力伝えたい

~地域課題解決に向けた活動~

魅力化開始以降、弓削高校が力を入れてきたことは地域での教育活動。2019年度からは総合的な探究の時間（総探）「しごとづくり学」を開始し、生徒が社会環境の変化に対応できる力を伸ばすことを目的に、町内の地域課題の解決策を授業で探っています。現在は捕獲された猪肉を使った商品開発を進めるチームやサイクリングでの町おこしを進める班など9グループが活動し、今回はサイクリング振興に携わる生徒取材しました。

自転車甲子園優勝！



弓削高校3年
まつの ふづき
松野 冬月さん

「上島町は信号がなく車通りも少ない、自分のペースで気持ちよくサイクリングを楽しめる。適度に坂もあり、景色も美しいので本当に面白いです」。

総探でサイクリングプロジェクトを進める松野冬月さん（3年）。活動を通して見つけた、町の魅力を語ります。

松野さんは静岡県島田市出身。高校入学を機に地元を離れ、現在はゆめしま寮で生活しています。

元々自転車に強い思い入れはなかったものの、先輩たちの活動発表に惹きつけられ、自転車班に加わりました。

活動では町内各島の観光スポットを巡るガイドツアーを毎年実施しているほか、幼児や小学校低学



ことを伝えました。

結果は優勝を勝ち取り、3年ぶり2回目の快挙となりました。松野さんは「高ぶっていた熱が体中に伝わっていくのを感じた。周りから見て、恥ずかしいほどに喜んでしまいました」と優勝時の喜びを表現します。

松野さんの活動は残りわずかですが、「PR方法を工夫し、全国に上島町の魅力を発信していきたい。活動をしっかり引き継ぎ、後輩たちには自分たちの色を出しながら盛り上げてほしい」と期待を込めます。

昨年11月には高校生が自転車に関する知識や技能を競う「自転車甲子園」（松山市で開催）にも出場。大会では道路交通法に関するクイズや実技審査、スピーチ、討論バトルなどが繰り広げられ、全国から集まった13校と勝敗を競いました。

スピーチで松野さんらは、上島町は外国からサイクリストが来るほど、自転車に適した場所であるにも関わらず、国内で認知が進んでいない現状を強調。自転車に特化したガイドツアーを企画し、認知度向上のために取り組んできた



ゆめしまサイクリング 2025.12.07

年向けの交通安全教室を開いています。

Interview 卒業生インタビュー 「患者さんに寄り添う理学療法士になりたい」



上村 彩希さん
(卒業生)

弓削高校では中四国の国立大学をはじめ、慶應義塾大学など難関私立大学への進学者を輩出しています。今年3月の卒業生では、Ⅱ型（主に、四年制大学に進学を希望するコース）の生徒9人のうち6人が広島大学、岡山大学、山口大学などの国立に進学し、私立でも法政大学などの有名校の合格が続きました。

この春、広島大学医学部保健学科理学療法専攻に進学した上村彩希さんは「予想外でも嬉しかった」と合格の瞬間を振り返ります。

理学療法士を志し、模試で伸び悩んだ時期も努力を止めず、公営塾に通いながら学び続けました。彼女をサポートしてきた公営塾の浜

田宜治講師は「受験計画ノートを活用し、ぶれずに戦略的に取り組んでいた」と成長を称えます。

進路を意識したのは中学2年生の頃。足の手術を受けることになり、元気をなくしていた母が理学療法士とのリハビリで前向きになっていく姿を見たことが原点でした。

弓削高校での3年間は「先生方に、勉強面だけでなく精神面でも支えられた。また県外生との交流で価値観も広がった」と語ります。

上村さんは「患者さんに寄り添い、何でも相談してもらえる理学療法士になりたいです。」と大学での学びに意欲を燃やしています。

地域のひとインタビュー 「地域の起爆剤になってほしい」

Interview

プロジェクトには生徒たちの活動を支える地域の方が大きく関わっており、弓削在住の英真介さんもその一人です。英さんが関わり始めたのは、町外からの留学生をサポートする「島親」に応募したことがきっかけでした。「親元を離れて生活する生徒を以前から知っており、何か力になりたいという思いを持っていました」。

現在は起業部と連携した商品づくりに携わるほか、SUP（スタンドアップパドルボード）体験やレモンの皮むき作業、食事会など、日常的な交流を通じて生徒との関係を深めています。

英さんは、魅力化プロジェクトによって全国から生徒が集まり、上島町に県立高校が存続して

いること自体が「町にとって大きな価値」と語ります。

高校がなければ、多くの子どもが中学卒業と同時に島を離れ、将来のUターンや移住の可能性も失われてしまう—その危機感が原動力になっています。

留学生には上島町を「第二の故郷」として愛着を持ち、地域に新しい動きを生み出す存在、「地域の起爆剤になってほしい」と期待を込めます。「生徒たちを地域の祭りやイベントに招き、自分自身も高校の行事に積極的に参加したい。生徒と地域が双方向につながる関係づくりを続けていけたら」と話しています。



英 真介さん
(弓削在住)